



RIFS通信

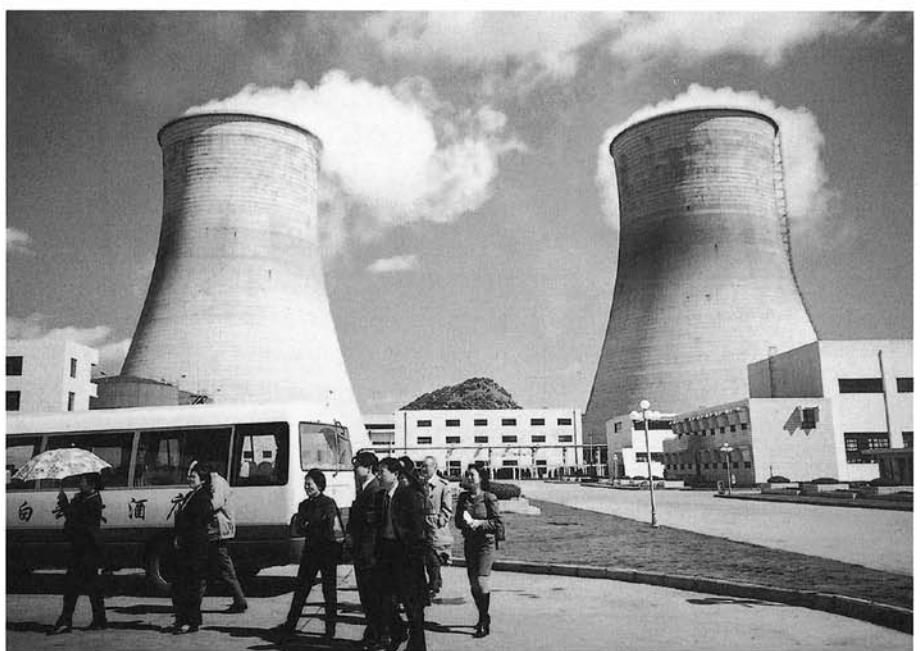
NUMBER
27

平成13年11月20日発行

■ 目次

1. 活動内容
2. 『国際交流の視点』
「対話を始めた日本」
3. 『研究・教育活動の紹介』
「異文化間交流(留学)における
インターネットの活用」
4. 『国際を考える』
「日本語・韓国語:この似て非なる漢字文化?」

▼中国雲南省の火力発電所



活動内容



研究交流事業

- ・企業倫理研究会
平成13年4月23日、6月9日、7月17日
- ・国際化と開発教育研究会
平成13年7月27日
- ・日本交渉学会
平成13年4月25日、10月16日
- ・日本応用心理学会常任理事会
平成13年4月28日、7月21日
- ・中東報告会
平成13年5月29日、9月13日
- ・ISA(Inter-school Association)
平成13年6月30日、10月27日

広報・出版事業

- 国際を考えるシリーズ第18号
「企業倫理:教育と現場」
—TIU企業倫理研究会報告第3集

国際交流の視点

対話を始めた日本

国立シンガポール大学
イノベーション・技術経営センター
上級客員研究員
ウー・チー・ユエン



日本はアジアで最初に先進国に到達することになった画期的な経済成長のために、長い間賞賛されていたばかりでなく、二十世紀を通じて輸出主導型の工業化を行ってきた一方で日本のアイデンティティを維持できたということで、皆の驚きを集めてきた。しかし、過去十年間そこそこの間に、日本社会がどちらに向かって進むかについて、優柔不断かつ危機状況に陥り、次第に多くのマイナス兆候が警告を発するようになった。

まず、学校の規律が急速に悪化した。報道によれば、ティーンエージャーたちは、しばしば悪質な犯罪を行うようになり、母親たちは子供に凶暴に当たるようになった。大都市では、多数の若者さらにはもっと年とった人々まで、日本人よりは西洋人になりたがっているようだ。広く流行していることでは、若者や一部年輩者まで頭髪を虹色に染めていることがあげられる。年とった世代には不可思議であるが、彼らは自身を「新人類」、そして「新新人類」とさえ言っている。さらには、ハードな仕事を伴う恒常的な職業に就きたがらないこと、その結果両親宅に長い間寄生し、これも新語であるが「フリーター」となっている。

では、日本はなぜこのようなことになったのか？日本の国際化の結果なのだろうか？

実際のところ、日本社会は少しずつ外国から移民を受け入れた結果として、他の文明との対話を増やしてきている。大きな人口変化により老齢化し、また若年層は3Kの仕事を嫌いしかも知識ベース経済に必要とされる技能を決定的に欠く、といった圧力のもとで、日本は多数の移民労働者を受け入れる以外に選択肢はない。もしこれに失敗すると、日本経済は悲惨な結末になるだろう。しかし、外国人労働者の流入は、均質な日本社会を変質させている。

日本社会がさらなる多様化を受けて、アイデンティティが危機に瀕していると認識するのは当然である。流入した少数者を、あらゆる害悪のスケープゴート（身代わり）にまつり上げるのも、また当然である。しかし、これは間違った見方である。

人類の歴史は、孤立して進化した社会はないと教えている。歴史によれば、文明の転換能力、すなわち文明のプラス方向の転換は他の文明との出会いと強く関連していることを示している。日本の発展にとって、二十世紀の西洋の影響は言うまでもなく、中国の儒教、道教、仏教、などが重要な役割を果たしてきた。文明の出会いは、緊張し危険を感じることが多いが、同時に開放的であり創造性を刺激する。

政治力の関係を樹立するよりはむしろ、日本がどのように利益を得るかについて、日本は他の文明とこの種の対話を求めるべきである、というのがこの小文の趣旨である。対話によって相互理解がさらに進めば、より寛大で受け入れやすい態度が生まれるだろう。日本が他の文明との対話をすることは、共通の目標を持つという共同意識をもたらし、「我々はどのような未来の世界に生きたいか？」「我々はどのようにして協力して今日人類が直面する問題を解決し、将来を形成していくか？」と言った重要な問題に取り組むことが可能になる。

著者が四年間東京に在住してもっとも強く印象づけられた日本社会の特徴は、3CすなわちCivility（丁重さ）、Considerateness（思慮深さ）、Courtesy（思いやり）である。間違いなく、日本社会は対話が増すことで転換しつつあるが、日本自身はその社会に深く根付いた3つの偉大なCを分かち与えることができ、またすべきである。これは国際社会に対する重要な貢献になるだろう。

（ウー博士は、シンガポール出身で国立シンガポール大学卒業後、オーストラリアの大学で博士号を取得、シンガポールの東南アジア研究センター、ASEAN事務局などに勤務後、1997年から日本の高等教育研究機構に四年間勤務し、シンガポールに帰国後現職。専門は経済発展、イノベーション）

（原文は英文）

異文化間交流(留学)におけるインターネットの活用

商学部助教授 山内 豊

異文化間交流におけるインターネットの役割 —

地球的規模で世界中のコンピュータを結ぶネットワークであるインターネットは、世界の人々が互いにコミュニケーションできる国際交流の場を提供している。具体的には、電子メールによる交信、メーリングリストや電子掲示板による情報の共有と共同学習、英文ホームページを作成し情報を発信しながらの交流学習、リアルタイムで互いの顔を見ながら話し合いを進められる国際テレビ会議による遠隔交流学習などを通して、国際理解や異文化理解が深められる。

東京国際大学の第1・第2キャンパスには、2001年度の情報通信ネットワークのリプレースにより、インターネットの専用回線に接続された最新のパソコンが1200台以上設置されており、先に紹介した機能を十二分に駆使して異文化間交流を進められる環境が整っている。

留学の事前・事後における活用 —

東京国際大学には、東京国際大学アメリカ校(TIUA)のほかに、ウイラメット大学(米国)、アリゾナ大学(米国)、グリフィス大学(オーストラリア)、バース大学(英国)、コンスタンツ大学(ドイツ)、山西大学(中国)をはじめ、世界に多くの提携校がある。これらの大学へ留学する前に、インターネットを使って事前に交流を行うことで、相手校の事情が具体的にわかり、詳細な計画が立案でき、知人も事前にできるので、留学期間には、より充実した勉学や生活を送ることができる。帰国後も、インターネットによる交流を通じて、留学時の研究をさらに深めたり、海外で得た友人関係を継続できる。

自立した交流学習を支援するツール —

学生たちがインターネットを使って自立的に交流するには、言語の壁や有害情報への対応など、さまざまな問題が存在する。この対策の一つとして、筆者のホームページ(<http://www.tiu.ac.jp/~yyama/>)には、「共同学習・国際交流での活用」という項目があり、交流相手の探し方、電子メールの書式や書き方、話題別の英語表現集、交流を進める上でのルールやエチケットなどに関するリンク集を提供している。さらに、学生が独立で英文を書いてコミュニケーションできるように、電子辞書(英和・和英、英英、類義語など)、電子百科事典、自動翻訳、英文表現集、語法・文法Q&A(自分で書いた英文が正しいかどうかなどの質問を出すと、ネイティブ・スピーカーがボランティアで回答してくれるサービス)、英文を自動的に読み上げてくれるサイトなどをまとめ、「学習支援ツール」として提供している。これらのリンク集はネット上でオープンにしているので、本学の学生はもちろん、インターネットを語学教育に活用しようとする高校や中学の教員にも好評で多くの方々に利用していただいている。

ネット上の交流と留学の相乗効果 —

さまざまな支援ツールを提供することによって、インターネットによる学生の自立した交流学習を促進し、実際の留学の成果をより実りあるものにすることができます。筆者の演習(ゼミ)からも、TIUA、アリゾナ大学、ウイラメット大学などへ留学生を毎年送り出している。東京国際大学の先進的な情報通信ネットワーク・システムと海外留学制度が相乗効果を上げて、21世紀に活躍できる国際人を育成できるように、私自身、有用な支援ツールの開発を今後もさらに進めていきたいと考えている。

【関連サイト】

- ・インターネットを活用した英語授業・英語教育研究リンク集
(<http://www.tiu.ac.jp/~yyama/>)
- ・同じ内容のミラーサイト
(http://www.geocities.co.jp/SiliconValley-Bay/2007/yyama_tiu/index.html)

日本語・韓国語：この似て非なる漢字文化？

国際交流研究所研究員 崔 琼愛（韓国出身）

“かぐや姫って、家具屋の娘ですか”、“何、何だって？”、日本に留学に来て3年経った後輩からの質問に、私の口はアングリだった。日本語の慣用句の韓国語説明書に、そのように書かれていたという。言うまでもなく、その著者の勉強不足が原因であると言えよう。しかし、間違った記述をしたあの著者の気持ちが必ずしも分からぬことでもない。まず、ある程度日本語を勉強した韓国人なら、日本語と韓国語は同じ漢字圏で、語順が同じであるということくらいは殆ど知っている。そこで、意味がよく分からない日本語に接すると、すぐに漢字でその意味を探ろうとする傾向がある。著者の使用した日・韓辞書に、「かぐや姫」に関する説明は載っていないかったようだ。

日本人には知られていないが、韓国語は日本語と酷似した文法体系を持ち、日本と同じく漢字圏に属する。しかし、漢字政策に関しては、韓国文部省の国語教育政策には一貫性がなかった。

韓国では、20年ぐらい前までは、高校の国語教科書には漢字が出ていて、実業高校では新聞の社説（相当なレベルの漢字も含まれていた）が読めるよう教育を施していた。しかし、その後、「純粹韓国語使用運動」や「国語純化運動」などが展開され、学校の漢字教育は廃止された。新聞の大見出しあり、誤解を呼びやすい同字異義語以外は、ほとんどハングルで書くようになった。しかし、すでに漢字は生活の中に根付いていたため、漢語そのものを排除したのではなく、漢字の音読みをハングルで表記したのである。もっとも、最近この政策が見直されつつあるが。

こういう経緯で、日本語と韓国語の漢字に、どんな違いがあるか調べてみよう。まず、完全異字同義語がある。

例えば、「膳物用」、これは韓国の免税店でよく目にする宣伝文句である。食べ物に限らず、お土産用の意味として使われている。これ以外に、韓国語と日本語で異なる表現が多い。便紙（手紙）、去来（取引）、団束（取締）、都売（卸売）、問議（問合せ）などなど、漢字だからといって、そのまま使った場合、誤解を招きやすい言葉である。

次は、まったく同じ漢字を使うが、順番が逆になっているものがある。ここには、数は少ないが四字熟語（故事成語）も含まれる。相次いだ外務省の不祥事に対して、小泉首相は“やっぱり綱紀が緩んでるんじゃないかな”とコメントしたが、この「綱紀」に対して、韓国語では「紀綱」を使う。これ以外にも、苦勞（労苦）、妻帯僧（帯妻僧）、婚約（約婚）、脅威（威脅）などがある。

次に、四字熟語（故事成語）をみると、古今東西（東西古今）、良妻賢母（賢母良妻）、鶴群一鶴（群鶴一鶴）などがある。

これら以外にも、韓国では「天高馬肥の秋」のように、漢語を解いて説明調に使う場合が多い。日本語を勉強するにつれ、漢語の韓国式音読みに慣れている韓国人にとって、この種類の言葉に一番悩まされる。とりわけ、日本語に出てくる漢字は音読みと訓読みがあり、一つの漢字の読み方が複数である場合がほとんどである。しかし、韓国では、漢字で書かれた場合、意味はともかく、全部音読みであり（中国の漢の時代に韓国に入ってきた漢字の音読みは、両国でかなり似ている）、そもそも一文字には概ね一つの発音が対応し、二つ、三つの発音を持つ場合はごくまれである。

私は、この理由として、韓国は名分を重んじ日本は実利を重んじる、といった国民性を反映しているのではないかと密かに思う。有史以来、韓国と日本は接触を続けてきただけに、言葉の交流も頻繁であったに違いないが、このような国民性が言葉の発展にも影響を与えて、同じ漢字圏に属しながらも、今日の韓国と日本の間に漢字の意味のズレをもたらしてきたように思われる。

もちろん、両国の言葉には、驚くほど同じ慣用表現もあるが、使用される漢字に関しては、まず前提として同一の意味は持たないと疑ってかかった方が、学習の進歩がはかどり、誤解を減らすことにつながるはずである。